リリカル英雄記

GIN@ブラァキィィイイ！！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカル英雄記

【Ｎコード】
Ｎ０４７５Ｙ

【作者名】
ＧＩＮ@ブラァキィィイイ！！！

【あらすじ】
聖王教会での任務を終え、管理局の命令で龍也・グラシアが地球に降り立って二年が経過した。
それまで平穏だった地球での日々も、２１の宝玉の来襲によって容易く崩壊し、龍也の周囲の者達をも巻きこんで膨張していく。
混沌とした事件の狭間で、少年は7人の少女の真実へと手をかける。全く新しいリリカルなのはの世界の扉が、今開かれる！

これは少女達の友情物語ではない。

独りの英雄の活躍を描いた、果てなき闘争の記録である。

プロローグ（前書き）

いよいよ始まりました。

『Ｆａｔｅａｒ　ｗｈｅｅｌａｃｋ～～リリカルなのは叙上伝～～』

活動報告でご存知の方も、ご存じない方も、２５時に第一話が掲載されますのでそれまでお待ちください。

もちろん、初めての方はこのプロローグをご覧になって時間を潰してくださってかまいません。

何分若輩者ゆえ未熟な文章ですが、お目通しいただければ幸いです。

プロローグ

「来たか、遂に」

太陽の光を一杯に浴びることが出来るよう設計された窓から射し込む陽を透き通るような白い肌で跳ね返しながら、口元に緩やかなカーブをつくりつつ告げられたその声に、部屋の空気が一変した。

太陽が落ちることのないような耀きを有し、時代に取り残されながらもその価値を不動のものとし、ある種の永遠すら体現しているような一室。

当然その中を包む空気は優美さや華麗さを有しつつも、格式や伝統といった重圧を同時に課す、独特の空気に満ちていたそこなのだが、その一言は、一瞬にしてそこを凍てつかせてしまったようだ。

カチャリと陶器と陶器が交わった際に生じる、よく響く音が鳴る。それにすら上品さを感じることは凄まじいことなのだが、その上品さは現在では無用の長物のようだ。

煩わしく室内に停滞し、その品のよさが目障りに感じてしまう。そんな感覚に変換される独特な空気が、その一言でつくられた。

ガタンッと次に響くのは不粋が極まったような音。同時に聞こえる荒い吐息が、この部屋本来の空気を汚していく。

「どういうこと？」

荒い呼吸同様、吐き出されたその言葉も荒さが目立つ。これが漫画ならば金の長髪が見えない力で浮かび上がってしまうだろう。

その様子が可笑しいのか、噛み殺された失笑が奏でられる。
「もうここにはいられなくなった。ということだ」
「はぁっ！！？」

落ち着きはらった――いや、普段通りといったほうが正しいのかも知れない。その陶磁器のような白い肌は煌びやかな耀きを有したままで、そこにあることで違和感を発せざるをいられない――真紅の唇をゆっくりと動かし、白い喉が小さく揺れる。
返答自体は小川が奏でるせせらぐのような抑揚の返答なのだが、小川は外来種によって蹂躙されていく。

「説明して！！！」
「ふむ……要求が多いな」

金の長髪が揺れるほど――ドカドカした足音が似合う――大胆な足どりで、優美の一言がよく似合う、太陽すら着物としているような少年に近づいていく。

彼から発せられた返答はまたもやせせらぐようなものだった。しかしその声はくぐもっている。細い腕が、小さな手が、その美しい白を覆っているからだろう。

「いいから答えなさい！！　私はあなたの主人（ミスタレス）。あなたは私に――」
「本日を持って、その任を解任させられた」
「え……？」

金の髪が乱舞する。それは激昂した少女が両手に力を目一杯こめて腕を振るっているからであり、荒波のように水を掻き混ぜ、豪風

を吹き鳴らす嵐のような感情の奔流であった。

それを間近で受けてなお、少年は平常心のまま、その流れを変えずに淡々と淡々と事実を告げた。

それは神の勅令にも等しき力を有する、暗雲を切り裂く轟雷であり、それは嵐を一瞬で切り取ってみせた。

同時に小川を荒す外来種の暴行を止めさせるには十分過ぎるほどの衝撃を生む。そしてそれにより、部屋はまた小川の秩序的な流れによって支配される。

嵐すら消し飛ばす一筋の閃光。それはあまりにも衝撃的だったのだろう。それを目の当たりにした少女はその衝撃と、驚きと、何よりも事実を受け入れられない、処理しきれない状態であるため、力無くその場で座りこんでしまった。

「元々俺は管理局からの客将。上官の命によりお前(ミスタレス)に仕えていただけの存在だ。どちらの命が俺の中で有力か、わかるだろう？」

「そ……んな？」

首元をさすりつつそう言う少年は後光が差しているようで、少女はその姿を恐れ多く感じ、呆然とすることしかできない。

「俺は明日にはここを発つ。急な話だが、替わりの騎士を早く決めることだ。一応俺のほうでリストアップは――」

「待ちなさい。騎士龍也」

突然の呼び止め。それは眼前(話し相手)の少女がもはや会話をすることがままならない状態であるため、少年――龍也からすれば不意撃ちにも

似た衝撃を有していたのか、注目を一瞬にしてかっさらっていく。
そして、注目を受けた声の主はむしろ歓迎といった様子でそれを迎えていた。

「……シャッハ。お前が口出し出来る立場だと――」
「えぇ、“本日を持って”ということはもうあなたは聖王教会親衛隊隊長ではないので、私の言葉など所詮戯言でしょう。ですが――」

少しも感情の波を見せず、淡々と指摘をする龍也。

それに対してシャッハと呼ばれた女性はあっけらかんといった様子で返し、チラリと床に座りこんでしまっている、まだ幼く、弱々しい主の姿を眺める。

「――騎士カリムへの温情とは言いません。言いませんが、せめてあなたから騎士カリムに、お別れをしっかりとしてくれませんか？」
「……無論だ。短い間ではあったが、カリムは俺の主であり、教え子でもある存在。無下にはせんよ」
「ありがとうございます」
「無論といった。礼は不要だ」

下げられた頭を眺めても流れる速度は変わることなく、龍也は座りこんでいるカリムへと近づき、腰を折る。

その動作すら――現象と言ったほうがいいかも知れない。王子がその妻となる女性へとアプローチをかける瞬間（時）のようなその現象は、絵画に描かれるそれよりも美しく、劇で演じられるそれよりも品があり、実際の行為よりもそれのように見える。

それは、まさしく芸術と呼ぶに相応しい美。

そんな現象をともに生み出しているカリムは、ただ呆然と眼前まで迫った少年の美しい頬を見つめていた。

「我、汝の元を離れしも、汝を思う。」

片方の膝を床につけ、少年離れて郎々と唱える。

「我が身、汝の傍らになきも、我が心、汝とともにあり。
我、常に汝を守護する大翼とならん。」

稟として響く、鈴の音のような誓いの言葉。

今、この空間はこの音に支配されていた。
が、喉の中を何かが通る音が、大きく大きく響く。

そして、支配は終わった。

「安心しろカリム。離れようとも、二度と会えぬわけでもなし。必ずまた会いにくる」

いつの間にか立ち上がっていた龍也が、その白い手をカリムの頭の上に乗せていた。
何事かと見上げるカリム。そんなカリムを見降ろす龍也。二人の視線が交錯した瞬間(時)、龍也は笑みを持ってカリムを迎える。

それは、ほんの気遣いなのだろう。だが作り話ならば、永遠に叶わぬ幻想を敢えて呟く悲劇となってしまいかねないほど圧倒的な雰囲気に、カリムは思わず涙した。

「……やれやれだ。発つ時は伸ばせないからな」

カリムの頭に乗せていた手を離し、両手を後頭で組む龍也。

「お気遣いなく」

涙が止まらないカリムに寄り添いつつ、シャッハはカリムへの言葉を告げる。

「騎士カリム、大丈夫です。騎士龍也は騎士カリムの心をわかっていながらスルーするようなお方ですから、騎士カリムの心情を察し、毎日メールをくれるはずです」

一瞬だけ鬼の形相が龍也の視界に入りこみ、消えた。

「おい――」

「騎士カリム、どうか落ちついてください。騎士龍也は騎士カリムの手作りお菓子を手作りお菓子で返すお心の持ち主ですから、週に一回はこちらに――」

「おい、自重しろシャッハ。俺にも俺の任務がある。そんなこと――」

龍也は続く言葉を紡げなかった。その理由は、シャッハの失望と脅迫の眼差しと、カリムの零れていく涙が増量されていくからだ。

「待て。待て待て待て待てなんだこの状況は？　待ってくれシャッハ。流石に無理だ。そんなことをしたら現場統制がだな――」

「二回……」

それは奈落からの２５２（救援要請）だった。

「月に二回……会いに来て……」

龍也は瞬間的に視線を逸らす。直後に飛んできた「空気読めよゴラァッ！　こんなに可愛いい女の子が頼んでんだぞ！！」というような念波が受信され、頬のほうから凄まじい圧力が飛んできているからである。

恐る恐る視線を戻すと、先ほどよりも大粒の涙を落し、顔をグシャグシャにする少女の姿が飛びこんできた。

「……わかった、最善の努力はする。だから――」

それは心からの善処の表明だった。同時に男として誇りでもあるだろう。いたいけない少女の涙にまみれた顔を見たくないという誇り。

男である龍也は、そんな安い誇りにかけて己に試練を言い渡したのかも知れない。

しかし、瞬時に四つほどの耀きが走る。

「シャッハ！！」

「抜かりはありません騎士カリム！！！　録音完了。同時にクラウドのほうへバックアップ完了しています！」

「成功……いつもありがとう。シャッハ」

「いえいえ、それが私の仕事ですから」

従者を心からいたわる主。そして自身の役割を理解し、それを喜びとしている従者の姿がそこにあった。

主従という力関係から圧制を強いられている従者達からすれば、この世のものとは思えないほど理想的な情景だろう。しかし、それを見つめる側の龍也はその奇跡に口を半開きにし、口元を痙攣させながら見守っていた。

「こいつら……」

開いた口が塞がらないとはまさにこのことを指すのだろう。

龍也はまだ口を結ぶことが出来ないでいた。

「そういえば、龍也はここから出た後はどこに向かうの？」

「……守秘義務がある。答えると思うか？　大体、教えたら確実についてくるつもりだろう」

先ほどまでの豪快な涙はどこにいったのだろうか。少女――カリムはすっきりとした爽やかな表情を龍也に向けて、そんなことを聞いていた。

だが先ほどハメられたこともあってか、龍也は機嫌悪そうに突っ張ねる――が、それに対してカリムはまた涙を浮かべていた。

「お前っ！！？　……もうその手には乗らない。乗らない」

「騎士カリム、問題はありません」

かかわるともうろくなことにならないと悟った龍也は、カリムを無視して外に行こうとしたが、シャッハの耳打ちは始まっていた。

「あなたの家庭教師を務めるほど聡明な騎士龍也なら、この要求が

通らなかったとき管理局要人が不慮の事故で――」
「それはもう完全に脅迫になっているだんが！！？　お前ら、そんな些細なことで局と――」
「私よ。いますぐアサシン部隊を召集――」
「わかった！　わかった言う！！　言うからやめろぉ！！！」
「本当？　ありがとう龍也！」

カリムは疲れも取れてしまいそうな満面の笑みを向けてくれたのだが、今回は龍也に疲労を溜め込んだだけのようだ。

「……もう嫌だ。この職場」

心からの言葉をもらす龍也だが、生憎とそれに対しての同情は彼に与えられることはなかった。

「それで、あなたはどこに向かうの？」
「……ふぅ。俺が向かう場所は第９７管理外世界『地球』。その中でも大陸から外れ、海に浮かぶ島国――日本（ジャッポーネ）だ」
「ジャッポーネ？」

小首を傾げるカリムに龍也は微笑みを浮かべ、肩を軽く叩いた後、その部屋を後にした。
彼女達の目に残っているのは、まるで外套のように立派な彼の朱の長髪だった。

そして、艶やかなその髪が聖王教会から消えてから、二年の月日が経過した。

プロローグ（後書き）

本格的なあとがきは２５時のときに。

お粗末ではありますが、感想、指摘、アドバイスなどいただければ幸いです。

ｗｅｂ拍手のほうでは匿名で感想が送れますので、そちらのほうも是非ご利用ください。

第１－１話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』（前書き）

二時間ぶりの方、ありがとうございます！＞ｄ（゜Д゜）☆スペシャルサンクス☆（　゜Д゜）ｂ

そうでない方もまぁちょっとだけ覗いてみてください＞つД｡）・゜・。・　。。・＊：．。・．・。．：＊・　。

本格始動いたしましたなのはＦＷ、第一話のほうもご覧いただけたら幸いです。

第１－１話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』

殺伐とした雰囲気が浮き雲のように広がっていく。

怨嗟の喧騒が耳を犯し、肌を掻き立てる。

沸騰し、溢れ出るような感情の高鳴りを一身に感じられる異様な空間がそこにあった。

何の変哲もない、ただの住宅地のように思えるそこ。だが庭から頭を出す枝がこちらを睨みつけ、嘲笑うように揺れ動いたり、仲間に異常を伝えるが如く葉を風に乗せて飛ばしたりと、侵入をひたすら拒むような雰囲気が発せられている。

優雅さと甘美さを併せて持つ、絶妙な薬で誘う夜の繁華街とはまるで違う、閉鎖された世界だ。

唐突に肌を風が舐めた。

それはねっとりと生暖かい風が包むように吹き、体の毛を逆撫でながら抜けていく。

そんな空気を、不気味な雰囲気すら、紫電一閃が吹き飛ばす！

悲鳴。

ひどくくぐもったような、潰れたような慟哭が、空気が吹き飛ばされた空間を切り裂くように響き渡った。そんな中で軌跡を描くのは一筋の朱の閃光。

同時に噴水の如く舞い上がったのは青。そしてまるで外套のように開放された朱が、下劣な下界から抜けでるように跳び上がる。

だが、それを許すまいと青が振りかかった。しかし朱の上昇は止まらず、結局朱は闇夜から消えてしまった。

虚しく重力に引かれて行った青の憤怒の慟哭が鳴り響いた時、もう一度、紫電一閃が刻まれた。

まるでこのような空間を否定するように、それはあまりにも鮮やかだった。

◇

「……つ……」

なんとも微笑ましい光景が広がっていた。

一室の中に詰まっているのは笑顔。笑顔。そして笑顔。成長期真っ只中の少年少女達が開放感に浮き足立ち、満面の笑顔を振り撒いて手荷物片手に各々のグループをつくっていく。

白を基調とした服で統一された彼らはまるで小さな太陽のように耀いてすら見えた。

ここは、私立聖祥大学付属小学校。

私立ゆえの設備のよさ、綺麗さ、そして大学までのエスカレーター式であることを売りにする学校だ。上記のことから地元では公立よりも人気があったりもする。

閑話休題

そんな教室の真ん中で一際目立つことが行われていた。注意せずともその空間だけ意図的に間が空いていて、他の子供達は少し端に寄っていることがわかる。

まるで暖かな小学校生活を体現したような空間に、ポツリと浮かんだ離れ孤島のような空間。そこにはこれまた目立つ朱髪が机に突っ伏していて、その髪が机の横から零れ、床についてしまっている。

まるで滝のように落ちている朱髪。それは人が有するとは思えないほど鮮やかで目に飛び越み、目に残像を焼付けてしまうような、幻想的な朱色だ。艶やかで健康に満ちたその髪は、人を惹き付ける魔性の魅力を有しているのだが、その朱髪の前ではまるで対比されるためといいたげに仁王立ちする、黄色がかった金の長髪を降ろす少女がいた。

「たつや……」

少女は高僧の如く、上から悟すように言葉を紡いでいる……わけではなく、目をつりあげ、口調を荒げ、その周囲には嵐の前の静けさと感じられる力を秘め、極めて平和的な手段で目の前のクラスメイト――朱髪を起こそうとしていた。

しかし、組まれた腕を握り締める力は徐々に強くなり、食い縛る歯は軋む音を奏で始めていた。

それでも彼女の目の前で突っ伏す朱は体勢を変えず、ただただ体力回復に尽力していた。

少女がわななく。

それはまさに導火線に火がついたことを周囲に知覚させるに十分なアクションで、教室内が対ショック姿勢を取らんと身構えていた。かくいう少女はと言うと、大きく大きく、さらに大きく息を吸ったところだ。

「た、対ショック姿勢〜〜〜！！」

とある男子の悲鳴が響き、クラスメイト達は事態の静観を取り止め、行動をシンクロさせる――といっても、ただ耳を一斉にふさぐだけだが。

そして金髪の少女が今まさにその溜めに溜め込んだ息を解放しようとした瞬間――

「五月蠅い。近所迷惑だ」

――その口が見事にふさがれた。

片手で少女の口を抑え、もう片方の手であくびを隠すのは、座高よりも長い、鮮やかな朱の長髪を持つ少年だ。

まるで陶磁器のように白く、きめ細かな肌は光を拒絶するように弾き返し、中央にて鎮座する美女の玲瓏さを持つ鼻筋が、顔全体のバランスを完全に統制していた。

その瞳は少し細く、蒼の鋭い眼光がまるで体を通して中身である心すら読み解っているのではないかと錯覚させる。
毒にも見える赤を含んだ唇が、迷える愚者を誘うように怪しく、艶やかに自己主張し、まるで娼婦のような誘惑を発するが、顔全体の統制によってまるで王族のような高貴さを兼ね備えさせていた。
まるで神が創り出した美の集大成。映像として記憶の片隅を永久に占拠するほどの美を有している少年だが、雄々しい眉毛と本能が強者と断定させる支配者独特の雰囲気。そして鋭利な眼光がただその場にある美ではなく、王者として人々に認知させる存在へと昇華させていた。
同時に長髪と美貌から女としたい人々の欲望を撃ち壊し、少年を少年(おとこ)と強制的に認識させる雰囲気を創りだす。

その少年の眼光を今一身に、直接、目の前で浴びている少女は一昔前に言おうとした言葉を忘れ、ただ呆然と少年を見つめていた。

「授業が終わったのなら今は休み時間だろう？　休み時間くらいこの束縛に塗(まみ)れた空間の中、自由に過ごしたいんだがな」

少年は小さくため息をもらし、手を離しながら続けていく。

「それで何の用だ？　それと周りを見てみろアリサ。みんながお前のハイパーボイスに迷惑千万。……といった表情をしているぞ」

手を離したといってももう片方の手は気怠そうに首に回されていた。

高圧的なその言動は明らかに見下す時のそれなのだが、彼にとってそれは冗談のそれである。雰囲気全体がそうさせるため、冗談が非常にわかりにくいことが本人の悩みらしい。

一方、それに対して少女は「なっ……なっ……」と打ちのめされたように後退るが、すぐに体勢を立て直し、少年を睨みつけて――

「あ、あんたが……あんたが寝てるから悪いんでしょうが～～！！！」

暴風。

それを巻き起こしたのは少女――アリサの憤怒とやりきれない思いからの発声なのだが、それは窓ガラスを揺らし、少年の長髪を後方へと乱舞させ、机に取り残されたプリント達を羽搏かせるほどの嵐となっていた。

奇しくもそれは周囲が対ショック姿勢を解いていた頃に直撃した想定外の惨劇であったため、教室の中は滅茶苦茶だ。

ただ一人、目の前にいる少年だけは涼しげな顔をしているのだが。

ちなみに、この時どこかから「た、確かに……」というアリサを擁護する意見が漏れていた。

乱れた髪を手櫛で整え、少年は呆れたようにため息を吐いた。

「だから、休み時間はどう過ごそうが個人の自由だろう。それが原因というのはいささか酷くないか？　あれか、俺には自由がないとでも？」

「で、でもあんたが起きていればここまでする必要ないじゃない！」

「……そこは優しく起こすなりなんなりあるだろう？　そういう女の子らしいことができないから、男子から敬遠されているんだぞ。

お前」

さり気なく酷い現実を突きつける少年。だがそれも、アリサをおちょくりたいという悪戯心ゆえというのだから質が悪い。

ちなみに、実際のところはアリサのそこがいいとする固定ファンが存在するようで、そう思っている者達は決して馴れ合うことをせず、遭遇すれば即ストリートファイトに発展するという恐ろしい慣わしがあるらしい。

「……そうしようとした私達をことごとく投げとばしたあんたがそれをいう？」

余談が入ったが、少年のそういう面に慣れているため、アリサは軽くスルーして恐ろしい事実を突きつける。最近の小学生事情は恐ろしい。

「一般論だ、他意はない。それに俺としてはお前やなのはのように口五月蝿い状況で目覚めるよりは、すずかみたいに爽やかな……ダメだ。あいつは代わりにその後が最悪に過ぎる……」

「……まぁ、それについては後でゆっくりと話すとして、早く屋上に行きましょう」

そのアリサの言葉に少年は周囲を見渡した。

そこにいるのはお弁当の包みと、飲み物を持ったたくさんのクラスメイトの姿。これで少年も、今がどのような状況なのか理解したようだ。

「あぁ、なるほど。今は昼休みか」

「そ、二人は先に行って場所取っておいてくれてるんだから早く行きましょう。
二人ともあんたが学校休んでる時、結構心配してたんだから」
「あぁ、待てアリサ」
「何よ？」
既に教室の外へ出よう踵を返していたアリサが唐突なその言葉に唇を尖らせた。
「窓から行っていいか？」
真顔でそんなことを口にする少年に、アリサはいい笑顔を浮かべて拳を撃ち出していた。

◇

「それで、どうしてこんなに遅くなったの？」
昼休みの時、生徒達から昼食をとる場所として人気が高い場所の一つである屋上。
そこには春らしい陽気を象徴する、暖かい風が吹きこんでいて、周囲を見渡せば生徒達が仲良くお弁当をつつきあう風景や、男女の組み合わせを容易に発見できるオアシスのような空間。
だが、ある一点だけはそんな穏やかな空気ではなく、圧力（プレッシャー）が支配する、オアシスとは正反対の殺伐とした世界となっている。のだが、完全に周囲の生徒達は明らかに空気の質が違うそこを無視し、各々

の食事や談笑に専念していた。

そこまで来ると完全に彼らが無視に関しての熟練者ではないかと錯覚させられるのだが、彼らはことここの生活においては真っ当ことなきプロフェッショナルであるため、その認識は大いに的を得ているのだ。恐ろしいことに。

それだけ聖祥(ここ)大学付属小学校では彼ら四人は有名人になっているのだから。

閑話休題

栗色の髪を左右二つに分けた天使のような笑顔を有する少女が決して笑えない確かな違和感を孕みつつ、普通の問い掛けを尋問のそれに昇華させて問うた。

そして彼女の隣りにてスマイルを出血大サービスしている深紫の少し癖のある髪を降ろしている少女と二人で、この異様と通常ならばとられる空間を形成しているのは明確だった。

「……やれやれ、慣れというのは恐ろしいものだ」

常人なら確実に楽なほう、即ち偽りであっても犯行の自白をさせかねないほどの重圧のなか、朱髪を揺らし、少年はそんなことを口にしていた。

前述の異界と化したこの場においてなお、さも退屈といった傍若無人な態度を変えない少年がそれを言うのは実に奇妙(シュール)な光景であるのだが、彼以上にそれを口にする適任者がいないのも事実であった。

傍らで苦笑をもらすアリサも、この空気に耐性ができた一人であるが、軽口までは流石に不可能なようであるからだ。

すると深紫の少女が自身のお弁当箱を指さした。

「？　どうした、すずか」

先ほどから１ｍｍも変わらないスマイルでそれを行う少女――すずかに当然のような疑問を提した少年であったが、それがいけなかった。

少年が指をさしているもの――可愛らしいうさぎカットにされたリンゴ――を視認したのを見るや否や、すずかはその手からどこからともかくフォークを取り出し、おもむろに振り下ろした。

そう、うさぎさんの背中へ。まるで正義（ギロチン）の刃のように。

背中からお腹までが銀の針で刺されたうさぎをすずかは指でさし、その指を今度は少年に向けてきた。

その瞬間、彼女から笑みは消え、代わりに地獄（ゲヘナ）からの使者の代弁者へと変貌していた。

「コレガ、オマエダ」

どーいう意味なのでしょう？　などと、隣りのアリサに「明日って晴れ？」というノリで聞くことを流石に危険と判断したのか、少年は沈黙を保ちながら運命共同体（アリサ）のほうへと視線を投げかける。

まあ予想通り縮み上がっていた情けないそれを見届けて、少年は

つまらないというセリフの代わりにため息を吐く。

ついでに言葉を飲み込んでいた。なんてことはない、「お前らカウンセリング受けてこい」という一般見解であるが、当然それを口に出すことは憚られたわけだが。

吐き出せない感情。吐き捨てたいもどかしさを溜め込んだ格好となり、やるせない思いをなんとか発散しようと、少年は今この状況を静観している大空へ挑戦的な眼差しを送ることにしたのだが――

「あれぇ？　龍也君はどうしてお話してくれないの？」

すぐに少年――龍也を大空（とうひ）から引き戻す天使のような可愛らしい声を堪能することなく即座に舌をうちつつ、視線を正面へと戻す龍也であった。

同時に助けてくれと瞳に涙を溜めて訴えかけてくる運命共同体を尻目に入れてしまったせいで、またいらぬ重りを背負ってしまった龍也である。

「別段、やましいことはないんだが……」

歯切れの悪い調子で――言葉を慎重に選んでいる風な龍也は切り出した。

「下らない理由だぞ、なのは、すずか。悪いが綺麗な落ちは期待しないでくれ。あと下手な勘繰りもだ、落胆が大きくなる」

それに対して無言とハッピーな気遣いで笑顔をつけた美少女二人が首を小さく上下させる。

だがその笑顔に隠れた瞳はまさに思考中の探偵のそれであり、これから語られるであろう“理由”の真偽を確かめんと全神経を傾注させていることはありありと伝わってきた。

まるで肉食獣（ハンター）に睨まれたような、確定的な死の宣告。

だが、その中でも平常なのが龍也という少年の特徴である。

「やれやれ、警告はしたからな？」

こうして、被告人（たつや）の答弁が開始された。それを前屈みの状態で聞き取る裁判員など、まるで雑草のように思いながら。

◇

その日、彼は機嫌が悪かった。

特に何かあったわけではない。ただ、新天地となるこの場所の土だとか、風だとか、雰囲気だとかが合わないだったり、時差ボケだったりといった些細なことが原因であることは彼自身が一番理解していた。

だが、理解しているからといって変えられない要因から来ている現状を変えることは不可能なのだ。人間はその場その場で自身を最適化させて生を営む。

“その場”とは社会である。ゆえに人間は『社会的な動物』と呼

ばれることもある。

そして微妙な差異であろうとも、一度最適化された機械を組み直すことは一朝一夕では不可能に近い。だから彼はこの不快感を解消することを諦め、一日二日、むしろ一週間くらいはこの不快感と添い遂げようと意気込んでいたところなのである。

そこで彼は舌を撃った。

自重を取り払い、音量を制御せず、ただただ不快感の大きさを表すための自慰的行為――であることを理解しつつも止められなかった自分の環境適合能力の低さに憤慨し、彼は舌を撃とうとして、止まった。

「いいぜ吸血種。今の俺は虫の居所が悪い。手前がぶら下げた獲物、満足とはいかないことが腹立たしいが、“今”の全力を持って狩ってやる。憂さを払すのなら御誂え向きの仕事に、今更ながら感謝してやろう」

乱暴な足どりで扉を目指し、大きな音を立てて外界へと侵出した彼は歯軋りを一つ奏でていた。

”ああ……満足に体が動かない”

内心で呟く本音はこの場であるなら決して変わらない現状への嘆きであり、憂いであり、落胆であった。

だが彼はそれを承知であったのだ。それでも心のどこかでは甘えていたのかも知れない。いや、必然であったのだろう。

常識（カルチャーショック）が非常識に変わるなど、そう簡単に受け入れることができる

はずがなかったのだ。

だから彼はこの不満の捌け口の発見に歓喜していた。捌け口に対して恋をしていたと言ってもいい。

「今から八裂きにしにいってやるからな」

初恋のような初々しさを持って思いを打ち明けるくらいには緊張していたようだ。

“暴力”という一方的なコミュニケーション。それが、緊張で凝り固まった彼の脳が思い人に対して考えついた告白の方法だった。

自然と顔が緩み、頬が上気する。彼は今、無性に上機嫌だった。

――平穏な眠りを享受する暗闇の中で、一匹の竜が放たれた。朱の大翼をはばたかせ、暴風と咆哮、そして絶対的な力を持って暗闇を闊歩するその姿はまさに王者。まさに傍若無人。まさしく最強を冠するに相応しい威姿(いし)で、暗闇に覚醒を呼びかけた。

しかし恐ろしいことは、この王者は本来の姿と比べれば赤子同然の力しか、当時は発揮していなかったということであろう。

海のせせらぎが美しく鳴り響く街は今、一匹の竜(ばけもの)が放し飼いにされている異常地帯と化していた。

衣(はな)を纏うことが許されず、固い皮膚に覆われた体と、いくつもの手を伸ばした独りの大老だけがその竜を悲しげに眺めていた。

大老が衣を纏い、威姿(いし)と運命によって王者を説得するにはまだ早く、世界はまだ、大老に対して冷た過ぎた。

暴風が、冷気を周囲に撒き散らしていく。

第１－１話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』（後書き）

いかがだったでしょうか？

何分若輩者ですので、拙いものになっていることは承知しているつもりです。ですので、皆様の指摘のほどをよろしくお願いいたします。

さて、本格的な後書きといいましてもじつはそこまで話すネタがあるわけでもなく、何を話したらいいものなのか……。

とりあえずこのなのはＦＷは、他の二次創作に比べてだいぶ毛色が違ってしまっているので戸惑っている方がいらっしゃるかも知れません。いいやいるでしょう。

まだ前編ですので難しいところもありますが、そういった場合はｗｅｂ拍手匿名メッセージや感想、このサイトのメッセージを利用して自分のほうにご連絡いただければお答えいたしますのでご利用ください。

中編のほうは明日の２５時に掲載予定です。

感想、指摘、アドバイスはいつでもお願いいたします。

それでは！

第１－２話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』（前書き）

みなさんお久しぶりです。
駄文召喚士こと、ＧＩＮであります。

本日はなのはＦＷの第一話の中編です。前回は内容的には微妙という自覚はあったのですが、何分文字数が多く……。この中編もなかなかに多く、統合するとそれはそれは大変な文字数になりますので、あのような微妙な形で分割を……。

おっと、前書きでいきなり後ろめたくて申し訳ありません。

今回は前回よりもなかなかどうしてかはっちゃけてしまい、ギャグ成分が大幅増量されていますが……お気をつけてください（マテ

第１－２話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』

体を引きずるようにそれは歩いていく。

住宅地の無機質な壁が冷たくそれを見つめていた。木も、門も、風さえもそれに対して冷たく接していく。

それは余りにも気怠げに進む黒コートだった。闇夜に溶けこむ、黒猫のような深闇のロングコート。だが肌の白さのせいかぼんやりと輪郭が写し出され、辛うじてながらそれが人間であることを告げていた。

その輪郭を横断する黒。それはあろうことか、黒コートに加えて黒のバイザーをつけていたのだ。

通常時ならば不審者と間違えられてもおかしくない、奇妙な格好（スタイル）。だが夜であったことが幸いしたのか、上手く闇夜に紛れている――かに見えた。

「どこだ……」

……そいつが左右に揺れた。

「俺の獲物はどこにいる？」

闇夜の中に咲く鮮烈な潤い。あまりにも鮮やか過ぎて――鮮血を彷彿させてしまいそうな朱髪を、それは見せびらかすようにさらけ出していた。

夜は、それを遠ざけるように目を逸らしていた。

◇

彼らにとって、それは束縛からの解放を意味していた。

もう何回聞いたか忘れてしまった。それほど日常の一部となった合図を鳴らすアラーム――学校のチャイムが鳴り響く時、学徒達は体を伸ばしたり、遊ぶ約束を取りつけたりと、放課後の活動のために各々のペースで動いていく。

そんな中、二箇所に人口密度が集中していることがわかるだろう。

そこは学級委員を務めるアリサ・バニングスと龍也・グラシアの席。

学級委員であると同時に成績優秀者である二人は自然とクラスメイトから頼られることが多く、人気がでるのだ。

現在は授業の内容に対しての質問が集中しているようで、二人とも親切丁寧に解説していく。

扉が開く音とともに彼らの周囲に集まったクラスメイト達が蜘蛛の巣を散らすように席につくことは、もはや風物詩であった。

◇

「ぷー」

頬を膨らまし、いかにも不機嫌であることを表しているなのは。だがまだまだ幼い顔つきがそれを彼女の思惑とは逆にいとおしさを強調しているものになっているとは、彼女は知る由もないだろう。

「なのは、頼むから機嫌を直してくれ」

「ふーん。龍也君なんて知らない」

そしてぷいっと龍也と反対方向を向いてしまう。

まるでストレスがたまったうさぎのような態度に龍也はお手上げといったジェスチャーをしてしまった。

「やれやれ、三人の姫の中でもなのは姫は特に大変だ」

そんなことを一人ぼやく龍也。もちろん、なのはの姫呼ばわりはその性格に対してである。

現在、なのはの機嫌という飛行機が急速落下している原因は一重に昼休みに龍也達の到着が遅れたからである。

もちろん、龍也の説明に納得はしたなのはだが、その後に四人で集まる機会が、悲しいことに龍也とアリサの人徳に阻まれてしまったのだ。

つまり、何か四人で集まって話したいことがあったのだろうと推理する龍也だが、アリサとすずかはそんななのはをなだめることに必死であった。

というのも、なのはのふてくされは長いのだ。この上なく。

”まぁ、後に残るすずかのほうが面倒――”

「龍也君。どうかした？」

「いや何も」

龍也の思考を見抜いたのか、間髪入れずにすずかに突っこまれてしまった。思考を見抜いたとしか思えないすずかは凄まじいが、何食わぬ顔をして返答する龍也も龍也である。

二人の間で開幕した内心を巡る視線対視線の争い。

そしてそれを尻目になのはの機嫌をなだめようと尽力するアリサを龍也は的ハズレなことと失笑しないように気をつけながら、この戦いに興じていた。

「ふん」

「なのは……だからあれは私達のせいじゃなくて――」

「そうだよ。別にアリサちゃんは悪くないよ」

とりつく島もなし。

一方的に和平の使者に射撃を喰らわすなのは国の辛辣な外交に、もはや和平交渉は不可能かに思われた。

「そういえば……社会科で職業レポートの課題があったか」

龍也は唐突にそんな言葉を投げかけた。

今日の時間割を思い浮かべ、生徒間に共通する話題――即ち宿題の話題を彼は選出したに過ぎないが――

「あぁ、別に私はパパの仕事を就ぐから――」

――“職業”。これは特殊な事情を持つメンバーがいるため、少しの盛り上がりを見せていた。

「お前の進路はわかってるよ。すずかは確か……」

「う～～ん。私は理工系に興味があるんだけど……」

「だが忍嬢は浅上みたいな学校に行って欲しいんだろうな」

そうなんだよぉ……とため息を吐くすずか。遠くで怒号が聞こえたが、みんながみんな気にしないことにしていた。

「なのははその点、両親が自営業を営んでいるからな。そういう話は簡単に聞けるだろう」

下校のための階段を下りながら龍也はなのはに言葉を投げておく。

完全空気扱いされているアリサが文句を並べるが、空気なので取り扱われていないようだ。

「うん……。だけど私自身はどうしようか悩んでて――」

ふうん。と考えるような相槌をうつ龍也。

なのはの顔が憂鬱そうに沈みこむのを見て、どうやら思わぬところでなのはが昼にしたかった話題を引当てたことを龍也は確信していた。

もっとも、なのはの変化は今日に起こったものであり、それが起こりうる話題はこれか漢字テストくらいなもの。
みなに話したいものであれば職業の話のほうが確立が高いと踏んでいたので、驚くことではなかったのか龍也自身は平然としていた。

「――龍也君は、将来やりたいものは決まってる？」

少し背の高い龍也を見上げるなのはと、考えこむような龍也の視線が絡み合う。「そうだな……」と口にしながら、龍也は慎重に言葉を選んでいるようだった。

「あ、あんたなら……うちの執事見習いくらいやれるんじゃない？」

ここで口を挟むのはアリサであった。

「鮫島の指導を受ければ五年くらいで立派な執事になれるわよ」
「……意外と俺の評価が高いんだな」

緊張を解くため息の後に龍也は疲れたようにそう皮肉を投げた。

“くらい”という言葉を使ったアリサだが、今のご時世で執事やお屋敷などを構えられているバニングス家はかなり特殊な家だ。
最近になって力をつけてきて、いわゆる“財閥”を形成しているバニングス家は、今やグローバルブランドとして世界に君臨している。そんな大企業をまとめるリーダーの補佐が、どこぞの馬の骨に勤まるわけがないのだ。

それになるであろう人物の補佐に１４歳でなれるというのは、確かに破格の評価だと言っていいだろう。

「なっ……さ、鮫島が優秀なんだから当たり前でしょう！？」
「いや、逆ギレ気味に言われてもな……」
「でも龍也君は頭いいし、運動もできるから大丈夫だと思うよ」

そしてもう一人のお嬢さま――すずかも賛成の意見を述べていた。

「あんた達は運動“できる”ってレベルじゃないと思うんだけど……」
「お姉ちゃんがうちに執事として欲しいって言ったくらいだし」
「……人気があることは大変結構なことだな」
「た、龍也君。大丈夫？」
「あぁ、どっちに行ってもろくなことにならんだろうと思ってな」
「「なんで（よ）！！」」

靴をはきかえ、逃げるように校庭へと向かう龍也。その顔はなんとも複雑だ。

「龍也！　うちはお給料いいし、設備も整ってるの知ってるでしょう！？」
「う、うちは猫さんがたくさん……」
「うちには犬がいるわよ！　犬！！」
「でも龍也君猫派だったよね！！」

なぜか鬼気迫る勢いで自分の家をＰＲし始めたお嬢さま－ｓ。

壊滅的に話の本筋から外れているに加え、正直に答えてもそれこそろくなことにならないことを重々承知している龍也は、とりあえず話の軌道修正に取りかかることにした。

「待て、俺のやりたい職業を聞かないで勝手に俺の将来を話し合わないでくれ」
「え？　執事でしょ。あんたのやりたい仕事」
「違う。というかまだ話していないから」

アリサに即答されたのがあまりにも効いたのか、龍也は嘆息して肩を落としてしまった。

「というか、ほんとに執事見習いやってみない？　ママも鮫島もあんたのこと気に入ってるし」
「お前、まだ小学生なのに……」

何を馬鹿な。というニュアンスを滲ませて龍也はまたため息を吐いた。

一方なのはが龍也の答えが待ちきれず、催促の声を上げようとした瞬間だった。

「止まれ！！　龍也・グラシア！！！」

そんな時に突然龍也を呼び止める声がした。なのははあまりにも間が悪い割り込みに不快感を表わにするが、目の前には校門を塞ぐようにたくさんの生徒達が広がっているのを見て純粋に驚いていた。

まるで人の群れと言っても乱暴ではないだろう。

校門手前で埋めつくされた同学校の生徒など、今まで彼らは見ることなどなかったのだから。

そしてその中から、五人の戦士が飛び出した。

「例え天が許そうが、大地が黙殺しようが、神がお前を認めようとも、俺達はお前を許さないっづ！！」

青のマントを羽織った少年が高々に言う。

「俺達の目が真っ黒い限り、お前の横暴はぁ……この右手にかけて許さない！！」

もう一人、青いマントを羽織った少年が怒気を孕んだ声で言った。どうでもいいが右手が痛いのだろうか、その少年は左手で右手を抑えている。

「この胸が、大翼が！！　熱く鼓動する限り、俺達の闘志と東方に存在(い)る神は不滅！！！」

今度は赤いマントを羽織った少年が拳を突き出しながら言う。なぜかハートが印刷された手袋をつけていて、無駄に熱い。

「えぇっと……この身、全ての男の味方？」

ただの制服の少年が、手をチラチラ見ながらセリフを言った。

”あ、カンペだ……”

そんな四人のツッコミを知らずに、この名乗りは続けていく。

「敵は今、ここにいる！　行くぞ！！　お前達！！」

少年達の中から飛び出して来たリーダーらしき少年が他の四人を

集める号令をした。四人は、リーダーのもとに走り、合流する。

「全てのモテない男達の最後の希望！！　俺達、五人揃って――」

「「「「「ゴニンジャー！！！」」」」」

五人それぞれのポーズをとってかけ声を揃えた。

だが、その声に反してポーズはみんなバラバラで、よくよく見て見ると、マントなし、青、青、赤、青というカラーバランス。

「いや、リーダーも青かよ。というか、『ゴニンジャー』って……五人だからって安直過ぎないか？」

空いた口が塞がらない。といった三人の様子を確認し、デコピンを喰らわせながら、龍也は五人に対してツッコミを入れた。彼らと目をあわせないようにしながら。

「黙れモテ男！！　貴様が無意識化に虐げてきた男子の悲鳴、それを解消するために俺達は立ち上がったのだ！　名前は所詮……飾りだ！！！」

じゃあなんで名前作ったんだよ。というツッコミを四人は同時にしたという。心の中で。

「……じゃあ、君は？」

龍也が完全に疲れたように指をさした。なぜかコマ〇チのポーズで完全に浮いているマントを羽織っていない少年を。

というか、未だにポーズは継続されている。

「あ、ただの人数あわせです」
「名前こだわってるじゃねーかー！！！」

あまりにも予想外の答えにとうとう龍也の何かがブチ切れたのか、珍しく怒号を上げていた。

「ん、いや待て……？　まさかお前ら、妖精守護隊（フェアリー・ナイツ）。業炎の親衛隊（バーニング・サーヴァント）。真紅の死者群（ブラッディ・ペイジ）のメンバー！？　まさか統合したというのか？」

だが瞬時に冷静さを取り戻した龍也は少年達を見渡して驚愕をもらしていた。

心なしか、その顔が徐々に青ざめていく。

「ふ、さらに我々には、最大派閥である黄金の天使（ゴット・プレミア）をバックにつけた。全ては、お前を倒すためになっ！！　龍也・グラシア！！！」
「黄金の天使（ゴット・プレミア）？　会長のファンクラブがなぜ俺を？」
「しらばっくれてももう遅いぞ、龍也・グラシア。お前は今日、ここで俺達にやられる運命なのだ」

リーダーらしき少年が憎しみをこめた視線を龍也にぶつけていた。だがその視線の発生源――彼の眼球には勝利を確信した者の余裕が写し出されていた。

「ねぇ、アリサちゃん」

頭がオーバーヒート寸前で、目が回りかけているなのははアリサの制服の袖を引っ張りながら、舌足らずな言葉を紡いでいた。

その様子を観察していた男子生徒達が、何やら満足そうな顔になっていくのは余談である。

「業炎の親衛隊（バーニング・サーヴァント）って、確か……」

「うん、私と龍也が屋上に行こうとしたのを妨害した……私のファンクラブみたいね」

「もっとも、親衛隊と名乗ってはいるが奴らが協力することはなかったんだ。

業炎の親衛隊（バーニング・サーヴァント）の加入者の証である波動を感じると、奴らはどちらがより神（アリサ）に相応しい従者（サーヴァント）であるかを決めるため、即ストリートファイトしていたくらいだしな」

「波動って……無茶苦茶だよ」

アリサの傍迷惑この上なさそうな表情を確認し、龍也が詳細を述べていく。それに対して、すずかは信じられない。といった悲鳴にも似た嘆息を上げた。

「まさか……そうか、あの時のあれが――」

「その通りだ。龍也・グラシア！　貴様を組織だけではどうしても葬りされないと理解した同志達が我々連合軍に加盟したのは、ほんの一時間しかかからなかったわ！！！」

「いや待て長い、長いだろそれは。というかさっきの授業中何をやっていたんだお前達は……」

どうやら龍也達が校庭にて、通称『殺人ドッジ』を展開している最中にはとんでもない会議が学校内で行われていたようだ。

ちなみにその会議はインターネットのチャットで行われていたようで、学校に携帯を持ちこむのも考えものとされたのは余談である。

ちなみに今まで同志である親衛隊同士でさえつるむことのなかった業炎の親衛隊(バーニング・サーヴァント)が、龍也に勝つためという目的のために協力していたことでさえ、有識者からすれば驚嘆ものであったのだ。

それほどまでに強い、目的の成就という彼らの意志。おそらく彼らは、いやこの目の前に集まった男子全てが、『打倒龍也』という目的に狂おしいほどの執念を持っていることは明白だった。

ちなみに龍也が昼休みの時に屋上へ窓から行こうとしたのは、業炎の親衛隊(バーニング・サーヴァント)の待ち伏せ(アンブッシュ)を予見してのことという事実に加え、業炎の親衛隊(バーニング・サーヴァント)の熱狂的な信仰心を理解しているため、うんざりとした表情で視線を逸らしていた。

もっとも、待ち伏せ(アンブッシュ)をテレッテーの曲を口ずさみながら突破した龍也の凄まじさのほうに舌を巻いていたようだが。

「それで龍也君、他の名前のやつは一体何なの？」

「あぁ、おおかたの予想はできていると思うが、妖精守護隊(フェアリー・ナイツ)はお前の、真紅の死者群(ブラッディ・ペイジ)はすずかのファンクラブだ」

やっぱり、というため息に微笑をもらしつつ、龍也はその三つの組織が集まった連合軍を見渡した。

凄まじい数だが、龍也は普段の調子を崩すことはなかった。

「それで、俺を消すだの葬りさるだの、物騒な話になっているようだが……生憎と今夜は淑女(レディ)との約束があるんでね」

挑発的な口調で、挑発的な態度で、何よりも相手を完全に眼中に入れていないと示されている、相手からすれば屈辱極まりないであ

ろう言葉の水鉄砲。

それを発射した龍也はゆっくりと、ゆっくりとその軍勢に対して歩み出していた。

校庭の固まった土と、龍也の靴とが擦れあう。少しだけ発せられた砂煙がゆらゆらと漂って消えた時、龍也の足も止まっていた。

それは本当に数歩。たった数歩しかない前進。だけれども、なのは達からすればあまりにも遠く、少年達からすればあまりにも龍也が接近してきたのではないかと感じさせる奇妙な雰囲気が、先ほどまでただの校庭であり、ヒーローショウもどきを先ほどまで上演していた珍妙な空間と同じであることを否定している。

肌が、そして喉が、まるで渇き切ったようになり、ピリピリとした刺激と、カラカラとした感覚を脳に送りこんでいく。

先ほどから――龍也が立ち止まってから――数刻と経過していない。にもかかわらず、龍也を見つめているものは文字通り、固唾を飲んで彼の次に起こすであろう行動（アクション）を待っていた。

龍也のあまりにも鮮やかな朱髪が、そんな注目を哄笑するように揺れてみせた時、高町なのはは息苦しい空間に懐かしさを覚えていた。

”あの時と、同じ……”

なのはの顔は周囲の少年のような警戒心剥き出しの戦闘体勢の表情ではなくなっていた。

それは純粋なる畏怖。
抵抗など風に草が揺れるような、取り止めもないことだとわかりきったものが、眼前の強者に捧げる畏敬の表情。
なのはの眼前には、一度だけみた本気の漢達の姿と龍也の姿が重なりあう。
それに対してかはわからないが、なのはの耳元で小さく鼻が鳴った。
「とっとと退(の)け」
それは王の号令に等しかった。
鋭い視線はまさしく獲物を見つめる時のそれ。傲慢はなく、ただ自らの力に絶対の自信を持ち、必勝を信じて疑わない、戦士(フェイダーイン)の目。
一般の小学生に過ぎない少年達は、一瞬にして自身が野ネズミであり、あちらが野生の王であることを自覚させられたようだった。
全身に貼り付く恐怖。圧倒的な力の差。そして何よりも恐れるべきは、確実に彼ら全員が異口同音にこの時の感想をこう述べさせたことだろう。
殺されると思った、と。
だが、それでも戦うという強固な意志。一矢報いるという神風精神。一歩を踏み出せる勇気を持ったものを、我々は確かに、敬意と憧憬を持って呼称していたはずだ。

「ふ……ふ……ふざけるなぁ！！！」

リーダーである少年が青マントをはためかせて突撃する。

それを見て自らの使命を思い出したのか、マントが次々と彼を追う。

青、赤、青青青という奇妙な隊列が、確実に急速に絶対的に接近していく死の恐怖を拡散させ、王の牙城へと向かっていく。

彼らはまさに勇者だった。

物語に出てくる、魔王を倒し、姫を助け、世界に平和をもたらす主人公（ヒーロー）達。

だが、彼らは大きな勘違いをしているのだろう。

勇者達の雄叫びは、彼らの命を燃やしたように大きく響き渡る。それが周囲の少年達に勇気を与え、この現状を再確認させた。

獣が吼えるような、地を這う合唱が重なっていく。少年達も駆け出していたのだ、彼らの敵に向かって。

「いいだろう」

その光景は龍也にどう映ったのだろうか。

本来ならば現状は戦場の真ん中に放置された無力な一般人を連想し、数の暴力にされるがままな状態となるだろう。

「傷跡が残らん程度には躾てやる――」

だが彼は自身の勝利を信じて疑っていない。

「――たとえ敗北（フィアー）の大蛇がその四肢を縛ろうとも、俺の興じのため……恐れずしてかかってくるがいい！！！」

少年達の雄叫びにまったく劣らない声量と威圧感を持って放たれた開幕のゴング。

二つの力が、今まさに混沌とし始めていた。

◇

始まりはため息からだった。

朝のＨＲが終わり、担任の先生から述べられた通達にアリサ＝バニングスは心臓が止まったかのような感覚を味わい、口を開閉させてしまった。

その理由を知り、多くのクラスメイト達がアリサの冥福を――死んだわけではないが――祈り、無事に冥府へ――死んだわけではないが――向かえるよう祈ってくれたことが、なおさらアリサの痛む胃に鞭を振るっていた。

例外として、あの鮮烈な朱髪を振りつつ「何をやらかしたんだ？」と不神経極まりない発言をした少年がいたわけだが――

”あんたが原因なのよあんたが！！”

――という言葉を必死になってアリサは飲み込んでいた。大変な労力を必要としたその作業だが、それは今でも胃の中に存在し、鞭とともにアリサの胃の中を散々と荒しているのだ。

原因である少年に対して、この不条理と理不尽に弄ばれている現状に対しての怒りをぶつけても、神様という存在は許してくれるのではないかとアリサは独りこの怒りの吐き出し方を思案していた。

残念ながら彼女は家柄の影響で無宗教だが。

ＨＲが終了したからだろう。学校の廊下にはまぶしい白の耀きが、たくさんの生徒が入り混じっていた。

教科書の借り貸しの約束や、昨晩のテレビ番組の話や朝の子供向け情報番組で扱われた玩具の話。また年頃ゆえに滅多に飛びださない、ニュースの話題も話されていたことにアリサは少々驚いた様子だったが、地元で起こった事故だから当たり前かとアリサは苦笑した。先ほどのＨＲで下校時に警戒する旨が話されたこともその要因だろうと付け加えつつ。

「あ、バニングスさんおはよう。こっちに来るなんて珍しいね」
「グラシア君に振られた？　なら私にもチャンスある？」
「ちょっと、私が最初にグラシア君に目をつけていたのよ！？」
「黙って言わせておけば……グラシアは俺の嫁だ」
「……ここは日本だぞ？　お前は結婚できませんよグラシアとは」
「そういえば昨日校庭で凄いのあったよね」
「メ、救世主（メシア）よぉ……」
「昨日のドッジボール、凄かったよ。ありがとう」
「だがこの気持ち……まさしく愛なんだーー！！！」

廊下にてかけられる多種多様な言葉に、アリサはなんとか笑顔を取り繕って応対した。

途中何やら女子多数と男子一名とで、激しい討論が繰り広げられていたが、かかわるのは無意味と判断して抜け出してきた。

非常に巨大な交友関係（ネットワーク）を形成しているがゆえの挨拶。いわば日頃の努力の成果の確認とも言えるできごとなのだが、それでもやはり彼の背中がちらつくことにアリサは純粋な敬意を表するしかなかったのだ。

嬉しい気持ちは、多少削られてしまっていた。

「まったく……でたらめ過ぎるのよ、あいつは」

廊下の窓から校庭を見降ろし、アリサはそんなことを呟いていた。

昨日の下校時、圧倒的な数の差を見せつけられ、勝敗などという言葉が不要とさえ思われた戦いの当事者として――弱者として巻きこまれた際であっても、彼はそのでたらめな力を暗示させ続けた。

それは常識的観点から見れば滑稽な強がりに違いないだろう。何しろ百を越える人数差がありながら、彼はそれを行ったのだから。

だが、それを直に感じ取った者はどうだったろうか――少なくともアリサはあの時のことを思い出し、寒くもないのに体を震わせてしまった。自発的に。

『でたらめ』

アリサが彼のことを表すならばこれしかないと確信を持って言える一言。

そんな彼のせいで……と思うとアリサは胃の痛みを思い出していた。

「後で鮫島から胃薬貰おう……」

冗談交じりにそう呟いたアリサだが、その冗談（コミカル）はこの現状（シリアス）を塗り替えてはくれなかった。

生徒会室。

朝のＨＲ終了直後ゆえ、一人で待っているであろう人物のことを思い出し、アリサは嘆息を抑えられなかった。

この後、龍也が功労賞と称して胃薬を用意していたことにアリサが気づくのは、次の休み時間のことであった。

第１－２話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』（後書き）

いかがだったでしょうか？

えぇ？　あぁ……はい。やり杉田なみにやり過ぎた自覚はあるんですよ。

ですが自分、書き出すと止まらなくなる質でして、気がついたらこんなことになって修正不可能に……。

しかもあいつら、この場限りのキャラではなく、ちゃんと今後に出番のあるキャラになっていまして……えぇ、これも書いている時に勝手に作っていました。何やってんだ？　俺。

なんでかこう……突発的にできたものでもなかなかのものができるのはいいことだとは思うのですが……プロットではこんなことになってないんだがなぁ（切実

今回はかなり突発的なひらめきに身を任せたとは言え、ギャグ方向にウェイトを置きすぎましたが、感想や指摘、アドバイスをいただけましたら幸いです。

また、本作に対する疑問点などがありましたら、お気軽にお伝えください。

もちろん、ｗｅｂ拍手からの匿名感想のほうも是非是非ご活用くださって構いませんので、何かありましたら遠慮なくお願いします。

ちなみにｗｅｂ拍手小話は、明日午後六時までには最新のものとなる予定ですのでよろしくお願いします。

それではお粗末ではありますが、以上で後書きとさせていただきます。

ご覧いただき、誠にありがとうございます。それでは！

第１－３話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』（前書き）

さて皆さんお久しぶりです駄文召喚士です。

いよいよこの『なのはＦＷ』の第一話も完成というところまでやってきました。

この無意味なくらいの文字数を本当にどうにかしていただきたいですが（黙れ

後編は後編にふさわしい、シリアス＋原作尊守で終わらせようと思っていますので、お付き合いいただけたら幸いです。

第１－３話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』

牽制のための左回し蹴りが空を切る。

持続することはないが、攻撃の後すぐに動けるのが回し蹴りの利点だろう。だが予想とは違い、牽制のために放ったそれはなんと先端を相手にひっかけるように当たっていた。

のけぞる相手、思わぬチャンスが回って来たと、放った本人は微笑んでいるところだろう。

すぐに右のアッパーカットで相手を追撃する。間合いは離れているが、前進しながら放つそれならば離れた間合いからもヒットさせることが可能なのだ。

体に拳が当たり、空へと投げ出される形となった相手。空中では身動きなど取れるはずもない。力無く重力にされるがままの情けない四肢と落下していく体――放った側がこのチャンスを逃すはずなどない。

「勝てる！！」

そう呟いて頬を緩めたのは、画面を見つめて興奮している少年によるものだった。

◇

「恐れずしてかかってくるがいい！！」

放課後になって間もない校庭で、たくさんの男子に囲まれた独りの少年――龍也・グラシアは確かにそう叫んでいた。

圧倒的な数の差を前にしてのそれ。誰もが血迷ったと嘲笑うだろう。

野生の王たる獅子も、猛牛（バッファロー）の群れの前では容易く絶命するという。蜂の群れは熊をも殺す。古今東西、どんなに力の差があろうとも、最後には多大な代償を払いつつも数が勝利する。というのは、もはや常識の一部になっているだろう。

ゆえに、そのセリフを言った龍也を見る者は愚かだと彼を侮辱しただろう。彼を遠くから見たならば。

彼の瞳は、この絶望的な数の差など映していなかった。

その中には来たる勝利だけを見据えている。同時に自信と確信を有した瞳から察するに、彼は確実な勝利のために動き出すことだろう。それがたとえ不可能なことだとしても、どんなに辛い道だとしても進み行く覚悟が、彼からありありと伝わってくるのだ。

そしてなぜか、周囲にも彼がその不可能を可能なできごとにするのではないかと期待させる何かが、ここには充満していたのだろう。

彼が獰猛な表情を浮かべ、狩りを始めるべく己が牙を剥き出しにしたその時だった――

◇

「そうは言ってみたものの、内心俺は気が気でなかった。当然さ、あの時やつらの数は百を越えていて、個人でしかない俺が勝てる道理がなかったからだ」
「そやかて、なんか龍也君ならやってくれそうな気がするんやけど……」
「口を挟むな。次挟んだら続きを言わないように――」
「うわっ、厳し」
「ん？」
「いっ、いやなんでもない。なんでもないからはよ続けて」
「あぁ……。だが後ろにいるあいつらのためにも、男の尊厳にかけても、俺は引くことを許しはしなかった。
だが勝てるはずはないだろう。不様にボコボコにされるだろう。それでも俺はやつらを一人でも多く倒して、俺の存在をあいつらに刻みつけようとした。
そして俺もやつらに向かって走った。もうすぐやつらと俺の拳と拳がぶつかり合う。
だが俺は、不覚にも目を瞑ってしまった。……大層なことを決意したところで、しょせん絶対的な恐怖には抗えなかったわけだ。
終わったと思った。
やつらにボコボコにされただろうと思った。
だがそう思った刹那に――なんと俺を助けてくれた人が現れたんだ」
「えぇっ！！？　ど、どうやって！？」
「……」
「あ……ごめんなさい……」
「まぁ、いい。……まるで不発弾が爆発したような音が響いて、俺は何が起こったのかすぐに確認した。

するとそこに立っていたのは……両手に木刀を持った二人組だった。なぜか覆面をしていたがな……。
そいつらは俺に言ったのさ。『ここは我々に任せて、君はあの子達を守るんだ！！』と。
情けない話だがそれに素直に従って、俺はあいつらと一緒に裏門から抜け出した。
追手も全部、あの二人組が倒してくれていたということは、安全な場所についてから気がついたがな……。
っと、今日の学校生活はこんな感じだ」
「……凄い話やなぁ。私も龍也君と同じ学校に行ってみたいわ」
「……それは俺のために遠慮してくれ」
「えぇ～～！　なんでなん？」
「色々あるのさ、色々な。それよりも紅茶を淹れようか？」
「うん。私はお菓子取ってくる」

◇

海鳴市中丘町。
海鳴市の中心部から少し外れたそこは、多少大きな一戸建ての住宅が並ぶ典型的な住宅地だ。
見渡せば、右から左まで理想のマイホームばかり。そこにマンションという集合住宅はなく、どの家も大体どんぐりの背を比べる時のような高さで並んでいるため、景色に起伏が少ないと感じられるだろう。
そんな住宅地の中の普通の住宅の一つに、八神家はあった。

一戸建てでありながらも住人は少女独りだけというあまりにも広すぎる家。

妙な出逢いでそんな家の主と知り合った龍也は、孤独に蝕まれる彼女のため、八神家にちょくちょく足を運んでいるのだ。泊まっていったのは、もう一度や二度の話しではではない。

「そうだ、はやて」

ティーカップを受け皿へ置く際の澄んだ音を楽しみつつ、龍也は目の前で茶菓子を並べている少女――はやてに声を投げかけた。

「なに？」

「頼まれた本、返しておいた。それと面白そうなファンタジーものの本を見繕って借りてみた。続きが見たければ借りてくるから、読み終わった後に感想を送ってくれ」

「うん！　龍也君のセレクトなら外れはないから楽しみや」

「勿体なきお言葉、ありがとうございます。お嬢さま」

たわいのない話ではあるが、最後の龍也の執事風の返答がおかしいのか、はやては大きな声で笑った。

執事ネタがうけた安堵からか、龍也も頬の筋肉を緩めて口角を少し持ち上げる。

そして二人の視線が交わると、二人同時にティーカップへと手を伸ばしていく。

持ち手に手がかかるのも、持ち上げるのも、口につけるのも、飲

む時間も、飲み込む時間すら全く同時。

二人の髪型や顔立ちの違いから、合わせ鏡のようだと称するのは無理があるが、動作だけ見れば二人はまさにそれ。合わせ鏡があるように感じられる完璧な動作であった。

カチャリという上品な音も二重奏（ダブル）になり、二人はもう一度目をあわせると小さく微笑みあっていた。

「龍也君の淹れた紅茶は本当においしいなぁ。もう私、自分で紅茶淹れられなくなってしもうた」

微笑みから一呼吸置いて、はやては紅茶に対しての舌鼓を打つ。

純粋な賛辞ではあるが、龍也はいつもはやてのところにいるわけではない。一人で紅茶と茶菓子を楽しめないというのは、それはそれで問題があるだろう。

たとえ冗談だとしても、会話を続けるために龍也は舌先を動かした。

「それはそれで困るだろう。淹れ方、教えてやろうか？」

「ううん。龍也君が淹れてくれればえぇよ」

この時、龍也ははやての顔を直視したと言っていいだろう。

とりとめもない話をして、紅茶を飲み、ティーカップから顔を離したその目の前の席、目の前のところに少女である八神はやてはいる。

茶色の髪を肩に届かない程度の長さで切り揃え、左の前髪の房に赤と黄の髪飾りがつけていて、顔立ちは快活そうな髪型とは裏腹に大人しそうな――小動物のような印象を与える少女だ。

学校で龍也が特に仲良くしている三人の中では、すずかと同タイプの少女であろう。まったりとした印象を与える西側のなまりも、そんな印象を持ち上げている。

そんな少女が、今、一人の少年をジッと上目使いで見つめている。

「おいおい、それは俺に依存しすぎじゃないか？　もし俺がいなくなったら紅茶はどうするんだ？」

「そん時は辛いなぁ。私、龍也君がいないと生きていけへんもん」

はぐらかすようにぶっきらぼうな返答を紡ぎ、ティーカップに口をつけた龍也に対し、苦笑しながら拗ねたような口調ではやては意見を唱えた。

「龍也君と一緒にいたら楽しいし、龍也君、本当に私によくしてくれる。……私の執事さんみたいな感じなんよ」

瞳を輝かせ、指と指を組み合わせつつはやては必死に言葉を選んでその言葉を並べていった。

龍也と一緒にいたい理由が、龍也のヘルパーとしての能力が高いから、と見られたくなかったからこそ、言葉を選んだのだろう。

「……」

一度傾けたティーカップを再度傾け、口に先ほど飲み込んだばか

りの紅い液体を流していくのは龍也だ。

その少し細めの蒼い目が、はやての行動を捕らえて離さない。

確かに龍也はちょくちょくこの大きい八神家の掃除を担当したり、夕飯を一緒につくったり、調子が悪いはやてのサポートをしたりと、かなりはやての生活にかかわっていた。

「確かにはやての執事みたいな生活をしているな……。夕方限定ではあるが」

「せやろ？」

懐かしむような呟きを、少し興奮気味な声が塗り替えていく。

この街にて龍也が暮らすようになってすぐに妙な出逢いで知り合ったはやてを、ある意味で甘やかしてしまったのだろう。

天涯孤独な小さな少女を、哀れみからだとしてもどうにかしてあげたい、と思わない鋼鉄で絶対零度な心を持ち合わせていないのだから仕方のないことではあるが。

という自己推察を行う龍也だが、特に意味はないとしてその考えは破り捨てられた。

「なら、俺はここに来る頻度を減らさないといけないな。はやてを自立させないといけない」

今現在のこれからをどうするのか、そこが全ての問題であるから、龍也は悪戯っぽい笑みを浮かべて嫌味ったらしく言った。

その時の一瞬ではやてが浮かべた表情に龍也は失笑を堪える必要

が生まれた。

見透かされていたのだ。

二年という付き合いの中で、大半が二人だけの時間で構成された二人の関係の密度は計り知れないだろう。ゆえに何気ない口調も、癖も、行動も、大体のことは互いに理解をしてしまっているのだ。

瞬きの間にはやても悪ノリの表情に変わり、龍也は微笑で口元を歪ませた。

「龍也君、私のこと……嫌い？」

狸め。という嫌味を龍也は口に出すことはなかった。

瞳に涙を浮かべて視線を逸らし、如何にもか弱い少女を演じているはやて。

龍也も直前のはやてと同様の表情に変わっていたことを、はやてはしっかりと見ていたのかも知れない。

この場の雰囲気が、そこまで重くないことからそれを推察させた。

「ふむ……言われてみればどっちなんだろうな。とりあえず異性として見ていないことは確定だ」

「あはは……。……龍也君、さり気なくひどくあらへん？　何気に傷つく……」

「それだけはやてとは親しく過ごしてきたからな。家族みたいなものか」

「夫婦みたいな？」

「だからそうじゃなくて」

ボケとツッコミではないが、はやての言うちょっとした言葉を、龍也はことごとく鋭い刃で切り伏せていく。

互いがそれぞれの役割を演じて、時間を潰すいつもの茶番劇。

最後の刃が振り下ろされた時、二人は互いに互いの顔を瞳に写し、まったく同じタイミングで破顔した。

互いに完全にリラックスをしていたことは、こんなやり取りからもうかがうことができた。

笑顔のまま、はやてがティーカップへと手を伸ばす。龍也も笑顔のまま、茶菓子へと手を伸ばした時だった。

不協和音が響き渡り、テーブルに紅い液体が広がっていく。龍也が目を見開いたのは、そこへはやてが顔から突っこんでいった時だった。

「はやて！！」

突然出た大きな声が、宙に浮かべたカップと小皿が奏でた不協和音と重なった。

皮肉にもその声は、仮面を取り払った本性の言葉であることを皮肉る役者はそこにはいなかった。

苦しげな吐息と、名前を呼ぶ声がひたすらに響いていく。

まだ、日は高々としていた。

◇

様々な音が好き勝手に騒ぎあい、混沌としている空間があった。

その建物の中に入れば完全に外の世界とは乖離された空間に引きずりこまれてしまったような感覚に最初は襲われたことだろう。

だが、日が沈んでしばらくたったその別世界にそのようなビギナーが入りこむことはないし、入りこむ余地すらないだろう。

様々な箱型の機体が魅力的な映像をその液晶を流しているが、人々の関心は別の箱に向かっていた。

悲鳴のような感嘆な声と、断末魔に似た叫びが響いた。

次に響いた勝利と敗北を告げる結果発表に、落胆の声はあれど喜びの声はない。

健闘というよりも純粋な戦いに対する賛辞の声を、勝者である少年は対した反応もしないで別の場所へ移動していく。

それについていくのが先ほどまでギャラリーをしていた者達の大半というのだから、それはまさに大移動といえるだろう。

「流石『赤鬼』だ。三本コンプリートとか人間じゃねぇ……」

対戦型のゲームにおいて、体力を削られないで倒すことがどれだけ難しいかはここにいる者達ならば熟知していた。

それでも、相手も名が知れた者だと言うのにそれをやってのける『赤鬼』は、彼らからすれば最高級のカリスマ的存在だ。

『赤鬼』とは当然ながら誰かがつけたそのプレイヤーを示す名前だ。

圧倒的強さで勝利する。さらにそれが当たり前のように、対戦中は声すら発することすらなく、勝利しても退屈そうに去っていく。

敗者は彼が持つ、あまりにも美しく鮮やかな朱髪を見つめ、力の差に呆然するしかないという。

『赤鬼』とは畏怖と憧憬を併せ持った、この空間の独自用語である。

同時にそれは、この世界の王を示す呼び名でもあった。

◇

少年――燕坂彰（つばめざか）は幸運だったと言えるだろう。

小学生時代、特にパッとした特徴のなかった彼は学校の中では意味がないことの代名詞として扱われていた。

陰湿なイジメ、暴力が無力な彼に雪崩のように襲いかかり、彼は

壊れてしまった。

自らの非力と周囲の無関心に殺された彼の怒りの矛先は、自らに向けられ、彼は彼を憎むことによって、正気を取り戻すことに成功する。

そんな彼が、ブラりと立ち寄ったのはゲームセンターだった。

そこは腕力も学力も関係ない。実力があればもてはやされる世界。その世界に魅せられた彼は、そこでもてはやされるためにゲームに没頭した。

そしてその努力が、報われようとしていた。

相手はそこそこのプレイヤーなのだろう。先ほど大量の人が同じ場所を目がけて集まっていったが、彰と相手のところにも数人ほどのギャラリーがいる。

一対一で並んだ戦績。次を勝てば勝者となるラウンドで、燕坂(つばめざか)彰は勝利への方程式のトリガーを引き当てたのだ。

「勝てる！！」

不様に身動きの取れない空中に投げ出された相手の姿を見て、それを外から眺めている――操作している側の燕坂(つばめざか)彰は興奮を抑え切れないでいた。

だがその口調と確定された勝利に顔を歪めているにもかかわらず、手元は冷徹に反復に反復を重ねたコマンドを繋いでいく。

勝利を告げる言葉が画面に紡がれ、彰は勝利の雄叫びを上げていた。

今この瞬間、燕坂(つばめざか)彰は誰よりも勝者だった。

たった独りで高見へと登った、正真正銘の勝者に。

◇

「あぁ、気がついたか？」

日が少し落ちかかり、カーテンを締めていても茜色と光が射しこんでくる時間帯になっていた。

それがわかるのはひとえに部屋の灯をつけていないからだろう。

遮光カーテンのおかげで部屋の中は薄暗く、余計にそうさせるのかも知れない。ただ、その薄暗さの中でベットの傍らにある鮮やか過ぎる朱髪と、少ない耀きを利用して光る白い肌はその存在感をありありと写し出していた。

それらの持ち主である少年は、ベットで横になる少女を覗きこんでいた。

小さくうめくような声を出し、固まった体を伸ばすために伸びていく小動物のような少女を、少年は安堵のため息で迎えていた。

「うなされていたようだが、大丈夫か？」

だがしかしまだ寝起きで寝ぼけているのか、少女は起き上がろうと試みるが上手くいかない。そんな中、すかさず補助に入って起き上がらせた後、少年は水の入ったコップに手を伸ばす。

「スポーツドリンクだ。ひどい汗をかいているからな、水分補給しておけ」

「ん……おおきに……」

寝間着すら大量の汗で肌に密着してしまっている。その不快感を感じていたのか、少女は素直にコップへと手を伸ばす。

「待て、俺が飲ませるから口を開けろ」

少年はあまりにも弱い少女握る手の力にギョッとして、少し慌てた様子で少女の口にコップをつけ、傾ける。

少しずつ、少しずつ減っていくスポーツドリンクの量が半分になるまで、煩わしいほどの時間が経過してしまったが、少年は懸命にコップを傾けていく。

コップの中身が大分減ってきた頃、少女の静止のジェスチャーで少年はコップをお盆の上に乗せた。

「着替えを持ってくる」

その後にお盆と一緒に少年は部屋の外へ移動する。その背中を見つめる少女の表情には安堵があった。

まるで自身の手足のように動いてくれる少年――龍也。その存在

が、体が不自由な少女――はやてにとって、どれだけありがたい存在であるかを想像するのは難くないだろう。

はやては密かに思っていた。龍也は自分のことを全て理解してくれているのだと。

二年という歳月の大半を二人で過ごしたことで形成された濃密な関係は、非常に強固なものであると。

だから龍也は、こういう時に冷蔵庫の中にある――

「風邪になったら困るからな。勝手にリンゴを切ってしまったが文句は言うなよ」

――リンゴを食べさせてくれるだろうと考えていたはやての頬は思わず緩まっていた。

「ほんまに……おおきにな」

心からの感謝の言葉を、なぜか龍也は頬を引き攣っていたようにはやては感じた。

それはほんの微細な変化だったことは、それが読み取れたはやてだからこそよくわかる。だからこそはやてはその龍也の真意を探りあぐねていた。

心に広がっていくなぜ？　という一言。既にもういつもの彼になっていてもそれは止まることはない。

「残りのスポーツドリンクももう少ないから、飲んでくれないか？」

コップに残ったスポーツドリンクを煩わしそうに言う龍也の表情と態度を見て、はやては焦ってコップに手を伸ばした。

そしてそれを一気に飲み干す。今まで迷惑をかけてきたのだから、その程度のことはしなければならないという脅迫観念が、彼女を喉を一気に乾かせたのかも知れない。

「あれ？」

飲み干したその時、何やら奇妙な感覚がはやてを襲った。

視界に映るものが歪曲され、混ざりあっていく。なんとも形容し難い、絶妙な浮遊感に酔いそうになった時、耳元に囁かれた単語が溶け込んでいく。

「そばにいてやるから、安心して眠れ」

聞き覚えのあるその声色にはやては安心して、意識を手放して混沌の世界に身を沈めていった。

その体を支え、横たわらせた後に外へ向かう影を、一体誰が止めることができただろうか。いや、できるはずもない。

はやての頬につたった涙は、誰にも認識されることもなく、ただ流れていった。

「悪いな」

振り返ることなく扉を閉めた龍也は、はやての心が支えを必要と

していたことを、誰よりも理解していただろう。

その顔に刻まれた悔恨の念が、今誰よりも正直なのだから。

◇

駆け抜けた衝撃と、破砕していくアスファルトの道路が、その異常性を誰よりも饒舌に語っていた。

満月が静観する住宅地の何気ない道路。普段は日常の何気ない一ページを刻む場所でそれは起こっていた。

黒の丸い――まるで生物のように飛んだり跳ねたりで縦横無尽に駆け回る何かから白衣の少女が逃げ惑うという奇妙（シュール）な現状。

だが悲しいことに今は深夜。

皆が寝静まってしまったこの時間では、少女を助けようとこの場に参上する猛（もの）者は誰もいないのだ。

黒の丸い何かがその弾力を使って突進する。

悲鳴を上げつつもかわす少女。だがその代わりに電柱が一本、真っ二つになって上空を舞った。

数本の電線によってすぐ着地するが、周囲に伝わるほどの衝撃がアスファルトにまた傷をつくる。

住宅地の塀を利用した、高速移動で黒の丸い何かが少女に肉薄する！

赤い、まるで血走った瞳の瞳孔はまるで最強の狩猟者である猛禽類のそれのように細められており、確実に少女をしとめようとする意志がうかがえた。

複雑な軌道を描いて飛翔する化け物。

だが少女は紙一重のところを見切り、その突撃を回避して、今まで逃げていたほうとは反対の方向へ走りだした。

「凄い……」

どこからか、感嘆の声が漏れた。

当然であろう。まだ十代前半であろう少女が何の物怖じすることなく、高速で迫り来る突撃を紙一重でかわしたのだ。

少女の運動能力の高さの片鱗としては十分過ぎるだろう。

しかしそれは向こうの化け物のほうも感じ取ったようで、少女に対してこれ以上突撃を仕掛けるのは無謀だと判断したようだ。

その証拠に化け物は、その体から無数の触手を発生させ、それらを一斉に少女に向けて動かした。

振り向いた少女に映ったのは無数に飛来する弾丸の群れ。それを視界におさめた瞬間、少女の顔は絶望に染まっていった。

そして突然立ち止まってしまった少女。その顔は絶望しつつも、瞳は飛来する弾丸を見つめて離れない。

着弾まで後五秒。

疑問の声が小さく響く。

着弾まで後四秒。

少女を心配する声が響く。

着弾まで後三秒。

少女を呼ぶ声が響き渡る。

着弾まで後二秒。

少女の様態を問うのと、少女を呼ぶ声が怒号交じりに発せられそうになった瞬間、少女は後方へと大きく跳躍した。

着弾まで後一秒。

触手が少女を追うように軌道を修正するが、半分以上は間に合わないようだ。

だが、残りの触手は少女に着――

「電磁抜刀（レールガン）・翔波（しょうは）」

――弾すると思われたが、その直前で触手達は見えない刃に切断

されたように全て叩き落とされていく。

断面から零れるものは何もないが、あまりにも突然のできごとであったがために化け物も、当然少女も何が起こったのか理解できずに呆然としていた。

だが少女は見た。触手の断面の角度から謎の斬撃の角度を算出し、それに従って道路を見ると、一文字に抉り取られたアスファルトの跡があることを。

「何やら事件と思って参上したはいいが――」

音もなく、まるで雲のように少女の目の前にそいつは着地した。

街灯に照らされてはいても、闇夜の中でなお映える漆黒の少し仰々しい鍛鋼の鎧を纏ったそいつ。

背中にかけた、ただ覆うだけの鞘に締まわれた太刀と、腰に刺した刀に小太刀という侍を彷彿させる武器を装備していた。

顔全体を覆う兜で表情をうかがうことはできないが、背丈はなんと少女と対して変わらなかった。

だがしかし、そいつから発せられる闘気はチンピラのそれとは全てにおいて違っていた。

「――まったく、いつから戦場は素人の憩いの場になったんだ？」

背中を覆うほどの朱い外套を――しかしそれはあまりにも一本一本の糸がバラけていて、外套なのか疑わしい――揺らしながら、そいつはあまりにも退屈そうにそう言った。

その姿、まさに――威風堂々。

運命は静かに回り出す。

悲しみしか生まない、壊れた終焉に向かって。

なぜならこれは欠陥の運命。

欠陥品の歯車は、運命を破滅へしか導かない。

『Ｆａｔｅａｒ　ｗｈｅｅｌａｃｋ』

これは終焉が定められた物語。

第１－３話『始まりは、いつも唐突にして迷惑なもの』（後書き）

いかがだったでしょうか？

何分若輩者ですので、拙いものになっていることは承知しているつもりです。ですので、皆様の指摘のほどをよろしくお願いいたします。

といいましても、今回も結構やらかしている感じが読者の皆様には漂っていらっしゃるのではないでしょうか？（苦笑

原作をご存知な方はおわかりかと思いますが、プロローグのカリムに加えて第一話ではやてと、主人公どんだけ交友関係広いの！！？

というツッコミをお待ちしております（ぇ

ですがプロローグと後編をご覧いただければ、この作品に仕組まれた基盤の設定がお分かりいただけると思います。

聖王教会はどう動くのか、なのははいったいどうなってしまうのか、そしてフェイトは？

という疑問にかられてくだされば喜ばしい限りですが、

それだけでは終わらせません。それが駄文召喚士クオリティ。

ですので、新たな勢力の台頭と、あんなキャラクターの参戦などなど、サプライズはまだ豊富に残っていますのでそのつもりで（笑

しかし何分、こんな作品ですのでわかりにくい点や疑問に思ったことが多いと思います。

そんなときはｗｅｂ拍手匿名メッセージや感想、このサイトのメッセージを利用して自分のほうにご連絡いただければお答えいたしますのでご利用ください。

感想、指摘、ツッコミ（疑問）はいつでもどこでも年中無休の２４時間お待ちしています。

駄文召喚士でした。

第２－１話『初めての共闘』

月光届かぬ深夜のほんの一部、たった一本の道路で始まりの事件は産声を上げた。

それから紡がれていく物語に比べればあまりにも小さく、他愛ないその事件から全てが始まったのであるから、人生が如何に数奇かがわかるだろう。

始まりを刻んだのは黒鍛鋼鎧の騎士と白衣の少女。

それは互いに混ざり合うことなく、混沌とすることを定められていたのからかも知れない。

さぁ、物語を始めよう。

◇

微風によって小さくはためく、闇夜と漆黒の鍛鋼鎧にはあまりにも不釣合いで目につく朱い外套がここにいる全てのものの視界を占領していた。

それはあまりにも鮮やかで幻想的な朱色だったのだ。まるで砂漠の中のオアシスのような美しさと違和感を上手く調和させたそれは必然的に人々の注意を引き付けてしまうのだ。

そしてその朱色のことを誇りに思っているのか、漆黒の鍛鋼鎧の

騎士は尊大な空気を振り撒いていた。

「まったく、こんな小娘も戦場にいるとはな。世も末というやつか」

手にしていた太刀を背中にかけているただ覆うだけの鞘に納めつつ、後方で座っている少女に対して振り返ることなく鎧はそう悪態づいた。

ただ、そういう鎧も背丈は少女に負けず劣らずであり、少年と形容してもまったく問題がないほどなので、この現状は奇妙（シュール）であることこの上ないのだが、先ほどのあまりにも衝撃的な映像の処理に追われているのかも知れない少女はこの少年の言葉に反応することができずにいた。

そんな黒鍛鋼鎧の少年は、前方にいる黒くて丸っこい形をしているが、いくつもの触手を生やした化け物のほうに視線を移したのか、感嘆の呟きを零していた。

一方、少女のほうは息を飲むことを止めることができなかったようだ。

突如響いた甲高い音であるがゆえに深夜の中で容赦なく木霊した何かを、少年は煽るように口笛を吹いてみせた。

先ほど切断された触手が切断面から泡立つように膨らんでいき、新たな触手が生成されていく。という血生臭い部分を見せつけるような映像が眼前で展開されたので、我慢できずに発した少女反応である。

「ほぅ、流石にロストロギアだけはある。内包魔力は膨大というわ

けか」

自己解決したように呟く少年に対し、明らかに一般人側の少女はその異常な光景を許容することができるはずもなく、不快感と恐怖に顔を歪ませていた。

次の瞬間、まさしく息を吹き返した触手が少年と少女を蹂躙するべく迫り来る。触手は先ほどの失敗から学習したのか、一太刀で切り伏せられないよう配置されている。

回避することは常人では不可能だろう。

蜘蛛の巣に捕らわれた様子を想像した少女はこの絶望的な現状を目の当たりにして、顔を伏せるべく首を降ろそうとしていた。

「やれやれ、くだらないな」

化け物のほうを笑ったのだろう。明らかに嘲笑の色が見えたその一言が少女にはなぜか自分自身に微笑みかけられたような感覚がして、ふと顔を上げてみた。

その目の前に広がっていたのは――

「大道芸でも手品でも、仕掛けがわかれば退屈なだけ。だが仕掛けもなにもない一発芸でこの俺を倒そうなど笑止千万」

迫り来る触手の一本一本、その全てが宙を舞っていて、獰猛で挑発的な笑みを浮かべているのであろう少年の健全な後ろ姿がそこにある。

汚く響く不快な音を奏でながら地面に叩きつけられていく触手の切れ端達。

その不快な音を聴き流した辺りで少女の優れた動体視力は驚愕の事実を認識する。

全ての触手の切り口が左から右に切り上げられた、もしくは右から左に切り降ろしたものになっているという事実だ。

少年の腰に慌てて視線を映すと、少年の刀は鞘に納まっていることがわかる。

それは少女に戦慄をもたらした。つまり少年は、刀身を鞘内部で滑らせつつ放つ“居合い”という技法で放つ斬撃を用いて全ての触手を切り落としたことになる。

それは斬撃を放つのと納刀の作業を行ってもなお迫り来る触手を落とす余裕があったことを暗に示しているのだ。

少女は直感せざるを得なかった。どちらが格上なのかを。そしてこの眼前の少年が自分と同じような日常ではなく、修羅の道を突き進んだ猛者であるということを。

左腰にある刀の柄頭付近に手を起いたまま、少年は腰を落して駆け出した。

だが速い。

その少年の疾走は、少女の同年代のそれとは明らかに違っていた。いや、それは少女が今までに見た人類の走りと比べても、明らかに

違っていることは明白だった。

一瞬ですらない。気がついたら少年は化け物の懐にもぐり込んでいた。それは視界に映ることすら拒絶する、誰にも追いつけない脅威的な速度だった。

「“縮地”……」

少女は父に教えられた言葉をポツリと呟いていた。

父の剣術の奥義はそれよりも凄いという趣旨の話しであったが、少女からすればこの“縮地”も凄い領域の中にある奥義であり、おそらくそうであろう走りを見て、やはり凄いという感想を抱いていた。

特殊なステップを用いることにより、初速の段階から最高速度に達成させる独特の歩行で、剣術の流派には広く伝わっていたという歩行術。

それが縮地である。

そして、眼前の少年の行動はまさにそれとしか言い様のない、刹那の疾走であった。

兜から獰猛な口元がのぞかれたような感じが少女を襲った。

少年は今化け物の懐にいる。

化け物は触手を全て両断されたショックからか、少年が速すぎたからか、少年の接近に気がついていない。

そして、少年の右手はまだ、左腰にある刀の柄頭付近に置かれている。即ちまだ刀身は鞘に納まっている。

次に出る少年の攻撃は決定されていたも同然だろう。

日本刀が有する斬撃の中で、おそらく最も高い威力を有する――居合いであると。

瞬間的に少年の黒い腕が振り上げられ、金属の刀身を少女の瞳に写すことなく、その斬撃は化け物を斬り裂いた。

だがおそらく、少年は驚愕したことだろう。

なぜならば化け物を斬り裂いた刃は美しい満月に晒されることなく、化け物の体内でその刃を留まらせてしまっているのだから。

咄嗟に舌打ちが響き、収縮していく化け物の肉の部分を感じ取ったのであろう少年は即座に刀身を引き抜き、後方へと跳躍した。

無事肉が収縮し切る前だったために引き抜けた刀身。その美しい白刃が下弦の月のように煌いた。

だが次の瞬間に迫り来る、切断された触手の根元に対して少年は体を捩ってみせるが、跳躍の方向が決定されている空中でろくに動けるはずもなく、少年はその棍棒よりもなお太い、大木のような触手をぶつけられ、少女の元へと戻ってきた。

「大丈夫！？」

瞬きの間に繰り広げられた攻防。その後に訪れた空白の時間に、少女の悲鳴に近いいたわりの声が響き渡り、少女は少年のほうに駆け出した。

だが次の瞬間、少女の体は宙を舞う。

「阿呆！！　敵に背を向けるなっ！！！！」

兜から鮮血をもらしながらも耳元で響く怒号に少女はまたも目を丸くしていた。

瞬間的に少女の体が黒鎧に担がれたことは明白だった。少女の背後から迫っていた魔の手から黒鎧は少女を救うために、少女を担いで後方に跳躍したのだ。

だが、まるで波打つようにアスファルトを跳ね、獲物を追って来る触手。

「片手の居合いでは荷が重いか……」

その様子を見て苦々しく呟かれたそれは、先ほどまで鼻歌交じりに戦っていた人物と同一とは思えないものだった。

だが一つ咳こめば、兜からは鮮血が零れていく。

弱っていることはあまりにも明白だ。

それでも黒鎧は意を決したかのように眼前の危機を見つめていた。

背筋を駆け巡る悪寒に少女は体を震わせた。

自分とはあまり背丈の変わらない黒鎧が纏う空気が、自分の周りのそれとはあまりにもかけ離れているように思えたのだ。間近で感じるそれは、先ほどとは段違いの圧力を感じさせるのだ。

黒鎧の右腕が、背中の大太刀へと伸びる。

ただ刀身を覆うだけの鞘からは容易に刀身が取りだされ、その白銀の刃が夜の中で神々しく耀いた。

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

続いて響く合成音声。その直後に、黒鎧の纏う空気がまたしても変容していく。

「魔力が……溢れ出している……」

その急激とも言える変化に、どこから感嘆の声が漏れた。

一方少女のほうは何が起こったのか理解できてはいないものの、目の前で起こっていることの“凄さ”を直感し、戦慄していた。

そして、暗闇が光によって支配されていく。

「打ち払え」

黒鎧が掲げた大太刀は、目を潰さんとするほどの耀き――それは神々しいまでの朱色の炎――で覆われていた。

突然発生したその変化に触手は一瞬ためらったかのように見えた。

その時生まれた刹那。それがあれば十分な存在であることを、少女は重々承知していた。

「烈破（れっぱ）」

掲げられた大太刀が――

「緋炎斬（ひえんざん）！！！」

――振り払われるまでに。

そして少女の眼前を埋めつくしたのは、切り払った触手もろとも埋めつくしていく、非情な朱炎によって生み出された炎海だった。

闇夜の中で発生した異端は、逆に闇夜を飲み干していく。その惨状は止まることがなく、全てを飲み干していったという。

炎が上げる雄叫びに押し出され、二人の少年は遠くへ離れていったのは、些細なことに過ぎなかった。

第２－１話『初めての共闘』（後書き）

ふぅ……なんか文句しか来ない気がする（死笑

では一時間後にまたお会いしましょう。

第2―2話『初めての共闘』

「さて、どうしようか」

多くの住宅がひしめき合う住宅地の一角で黒鎧と少女は腰を降ろして大きく呼吸をしていた。

先ほどの炎海であってもあの化け物は止まらないだろうと考えた黒鎧が、少女を担いだままとりあえず安全な場所に移動したためだ。

しかし彼が手負いであったということと、彼は即座に化け物を追撃しなければならないので未だに住宅地を抜けてはいないのだ。

そこまで汚れていないおかげで、真っ白を基調とした服がよく目立つ少女と、大きな傷が多数刻まれた上に、血糊までついた黒鎧との一枚絵はなかなかにシュールだ。

それを気にしているのか、少女は先ほどから黒鎧のほうを気にしているようである。もっとも、黒鎧のほうはそんなことにかまっていられないのだが。

「とりあえずお前、早く家(うち)に帰れ。元々お前はあれとは無関係だろう？」

「『お前』じゃなくて、私はなのは。高町なのはだよっ」

「……いや、今は名前なんてどうでもいいだろう？」

「だって私は『お前』って名前じゃないもん！」

「そうか……じゃあなのは、俺のことは『リンク』と呼べ」

「わかった――」

「もちろんコードネームだが」

どうやら少女――高町なのははリンクという偽名を名乗った少年とコミュニケーションを取りたかったようだ。

それが思わぬ形で叶い、少し場違いな笑みを浮かべていたのだが――

「む～～」

コードネーム。作戦上の名前――つまり本当ではない名前を告げられたことに露骨な表情で不満を表にするなのは。

背丈から、同年代の親しみを感じていたのかも知れないが、さり気ない拒絶にショックを受けた。という格好だ。

ここは戦場であるというのに場違いななのはのその態度は、完全に戦場慣れしているリンクの拍子をズラすには十分だったようだ。

戦場の前線にある独特な緊迫感は、完全に拡散していた。

なのはのほうは相変わらず不機嫌な顔だが、リンクの立場を考えてそれ以上の追求をすることはなく、大きな音を立てて座り直した。

そっぽを向いて不愉快であることを全身でアピールしているのだが、リンクからすればそれは苦笑をもたらすに十分なものだったらしい。

「おっと、忘れるところだった」

そう言って腕を伸ばすリンク。その先はなのはの肩だ。

「え？」

急なリンクの接近を感じ取ったなのはが咄嗟に振り向いた。

通常なら振り向くなのはの顔に腕が当たってしまうところだが、リンクは腕をあらかじめ引いていた。

「危ないぞ」

そう言いつつも、リンクは再度なのはの肩へ手を伸ばす。

そしてそこで彼が掴んだものは――

「い、痛い！　痛いって！！」

「フェレットさん！？」

「やはり変身魔法だったか、魔力は少ないようだが俺の目は誤魔化せないぞ」

――なんと人語を話すフェレットだった。

前足をしっかりと手の平の中に入れられたフェレットは、後足をバタつかせて抵抗するが、リンクの手の平から抜け出せる気配はいっこうにない。

「リンク君、なんでこんな――」

「お前だな。管理外世界の住民にデバイスを与えたのは。

……大方なのはを使ってあのロストロギアを回収しようとしたんだろう？　どうなんだ？」

「ち、ちがっ……」

「リンク君！　止めて！！」
「黙っていろなのは。こいつはお前を利用しようとしたかも知れないんだぞ」
フェレットはシュールにも人語を発声しているが、リンクの絞め上げる力が強すぎて上手く言葉になっていないようだ。
「それでもっ！」
『僕はユーノ。ユーノ・スクライア』
「え？」
「念話、テレパシーみたいなものだ。……ふむ、発掘民族のスクライアか？」
『そう、僕はあのロストロギア、ジュエルシードを発掘したんだ』
絞め上げられているので口からではなく、念話によってフェレットことユーノ・スクライアはコミュニケーションを取ることにしたようだ。
しかし、突然頭の中で聞こえた声になのはは戸惑いを見せていた。
『だけど、聖王教会に運ぶ途中で輸送船が事故か、人為的な事件に巻きこまれてしまって……』
「聖王教会が？」
『僕にもよくわからないけど……』
「ん？　ああ、もういいだろう」
手の中でユーノがぐったりし始めたのを感じたのか、リンクは握力を緩めていく。
緩められたためにゆとりができたので、ユーノは酸素を貪るよう

に取りこんでいく。

そしてユーノの呼吸が落ちつくまで、正確に二十秒を有した。

「ぼ、僕にもよく――」

「いい。まずは情報だ。あれは一体なんなんだ？」

「ジュエルシードは、望みを叶える力があると言われています」

「願望器だと？」

「はい。だけど、願いを間違った形で叶えてしまう不完全なもので――」

「今はただ暴走しているだけのようだが、あれが誰かを取りこんだら厄介なことになりそうだな」

あの化け物の体のようなものをつくっているものは魔力であろうと考えていたリンクはジュエルシードの反則さを改めて思い知ることになった。

いくら斬り払っても再生し、かつ形状を自由自在に変えられる膨大な魔力。それは現在、暴走という方向性のない力の発散のために起こっている。

これがもし明確な目的が与えられた時――最悪人殺しという望みにその力が全て向けられた時、より恐ろしい厄災を振り撒くことを想像するのは難くない。

現在、化け物はリンクという天敵の存在により迂闊に行動できず、あの場に止まって警戒していることをリンクは察知している。

リンクが体を治す程度の時間は稼げると計算するリンクだが、討伐にかかる時間までは予測不可能だ。

「もっとも、最終的には“あいつら”が討伐するだろうが、俺の弱点が露呈するのは避けたいな」

小言で呟くリンクのその言葉は何か意味深な含みがあったが、誰の耳にも入っていないようだった。

「――管理局と聖王教会のほうで厳重注意の警告が出された危険なものなんです」

「わかった。ようはあのままで放置しているとマズいのだろう？ならすぐに討滅するしかない」

「えっ！？　その体で！！？」

軽く討滅という単語を口にして立ち上がるリンクだが、なのはのあげた驚愕の言葉がしめすように、その体は万全と言えるものではまったくない。

黒鍛鋼の鎧で全身を覆われているためわかり辛いが、大量の吐血を起こしているということは内臓の負傷の可能性がある。

肉体のほうの損傷は不明だが、強烈な打撲は確実にあることだろう。

一撃一撃が大打撃の化け物に、そんな最悪のコンディションで挑もうというリンクはあまりにも狂っている。そうなのはの瞳には映っていた。

「今度あんな攻撃にあたったら、きっと死んじゃうよ！！？」

なのはのその発言はもっともだった。

超人的な運動性と絶妙な居合いを持ち合わせ、同年代、いや人類の中で考えてもトップクラスの強さを有するリンクでも、あの攻撃を喰らい、動けなくなったところを連続攻撃されたら――首や頭にあの攻撃が当たるか心臓や肺を貫かれれば即死するだろう。

相手は人外の化け物なのだから。

だがそれでも、必死の壇上に向かうと承知しているであろうリンクは笑みをもらしていた。

死地へと自ら赴く狂人にしてはあまりにも穏やか過ぎる笑みになのはは疑問を隠せない。

「俺が死ぬか、それはまたなんとも笑えない話だ」

笑みを絶やさずにそう答えるリンク。

「だがななのは。あのままあの化け物が暴れるほうが笑えない。だから本隊の繋ぎとしてでもいかないといけないだろう」リンクは死地へと振り向いた。「ああ、俺が死んだら、こんな場面に遭遇した不幸ということで弔ってくれ」

「そんなこと――」なのはが立ち上がった。「そんなことがわかってるのに、行くなんておかしいよ！」

「わかってくれとは思わんさ」

冗談が消えた。

先ほどまでのおちゃらけた雰囲気はもうここにはない。それを感じ取ったなのはは小動物のように体を震わせてしまった。

目の前の背中が、大きくなっていくのをなのはは感じた。
どんな重荷にも耐えられそうな、大きな大きな背中になっていくのを。

「だがななのは。俺はな、ちゃらんぽらんな気持ちで戦場に立っているわけではないんだ。
俺のためではなく、人のため。
誰かが不幸になる原因があるのなら、俺はそれを取り除くために戦いにおもむく。
それが俺の誇り、酔狂な誇りだ。だがこいつがないと俺は戦うことができないのさ。こいつを捨てたとたん、俺は俺で無くなると言っていい。
だから俺は、俺であるためにこの酔狂な行為を繰り返し続けなければならないんだ」

それはなのはにとって、あまりにも大き過ぎた決意の壁であった。
大き過ぎる決意。それは全てを拒絶してでも誇りを守り抜くという意志表示であり、生半可な心意気では踏みこめすらできない、リンクの絶対領域と化していた。
背中が大きいことは道理であった。
彼は全ての人間を、より多くの人間をその背中に背負い戦っているのだから。
何の見返りも求めず、それが誇りであるだけでそれを行っている。

さらにそれがどれだけ狂っているのかを理解している風な口振りで、彼は誇りを語っていた。

狂気を狂気と理解し、身を任せるのではなく肯定する最も質の悪い狂人。

それがこの黒鍛鋼の鎧武者――リンクの正体なのである。

そんな戦場に取り憑かれたような狂人と、先ほどまで戦場のせの字も知らなかったなのはとでは、あまりにも人間として開きが有り過ぎたのだ。

なのはは、そんな非現実的（リンク）な少年を追うことができなくなっていた。自分の中の常識と、彼の中の常識があまりも大きな断層によってわけられていることを悟ってしまったから。

自分達の住む世界と、彼が住む世界の質が違い過ぎることを理解してしまったから。

そして何よりも、自分と同年代の少年がここまで強烈な意志を有していることがなのはには信じられなかったから。将来のことで右往左往していた自分や、そこまで強烈な意志を有していない友人達と比べて、リンクという少年は異質過ぎるのだ。

だからもうなのはは何も言えず、立ちすくむことしかできずにいた。

「ああそうだ」

しかし唐突に響いたリンクの独り言が響いた。

「素人に戦場を荒されたくはないがどうしてもあそこに戻りたいなら、覚悟と、封印魔法くらいは必要だろうな」

そう言い残してリンクはいってしまう。

必死と承知しつつも多くの命のために。自らを犠牲にしてでも他人のために肉を差し出すという狂人の呪いのために、彼は戦場へと帰っていくのだ。

なのはは暗闇の中でも耀きを失わない大きな背中に、鮮やかな朱髪にぼんやりとしたした状態で手を伸ばしていた。

小さくなっていく朱い点は、既になのはの拳にも納まるほどになっていたが、それでも進むべき道を見据えて歩むその姿は、その道を見つけられていないなのはにとってまぶしすぎたから。

リンクは、遠くに行ってしまった。

だがなのははその場から動くことはできなかった。

《マスター……選んでください。彼を追うか、それとも元の場所へ帰るかを》

そんな彼女を呼び戻したのは、聞き覚えのない電子音声だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0475y/

リリカル英雄記

2011年12月25日22時04分発行